

## 《資 料》

## 17世紀ネーデルラントにおける法文間矛盾論\*

藤 田 貴 宏 (記)

アントーン・マテウス I 世

「法の矛盾解消の三つの手法が反駁された上で、全ての矛盾が  
解消できるわけではない旨主張される」

1. 法の矛盾解消には三つの方式があり、トリボニアヌスの証言に反して法の矛盾対立を認めることに良心が咎める者たちはしばしばそれらの方式に頼っている。

---

\* 以下は、アントーン・マテウス Anton Matthaeus I 世 (1564-1637年) の『六つの法学小討論 Collegia juris sex』(1638年初版) 第一巻「法の基礎に関する小討論 Collegium fundamentorum juris」の第五討論 (1647年フラネケル刊「再版 Editio altera」46-51頁)、ベルナルドゥス・スホタヌス Bernardus Schotanus (1598-1652年) の『法学演習、ここでは、法の基本事項が、学説彙纂の方法に沿って、法学提要の全箇所、並びに、勅法彙纂の私法関連の章も挿入しつつ、便覧風に述べられる Examen juridicum, quo fundamenta juris secundum methodum Pandectarum, subjectis suis locis omnibus Institutionum ac Codicis de jure privato titulis, compendiose proponuntur』(1639年初版) 第1巻第3章において、「法文の解釈について De Interpretatione Legis」の表題の下に「法文間矛盾については如何に判断すべきか Quid statuendum de antinomis?」述べられた箇所 (1657年レイデン刊「最新版 Editio ultima」18-19頁)、ユルリク・ヒューベル Ulrik Huber (1636-1694年) の『新たに増補された後半部を含めて全二部に分けられたユスティニアヌス余滴、ここには雑多な内容、とりわけ、法に関わる人文的事項が収録されている Digressiones Justinianae in partes duas, quarum altera nova, distinctae; quibus varia et imprimis Humaniora Juris continetur』(1688年増補第二版) 第二部第一巻第四章 (1696年フラネケル刊「第三版 Editio tertia」419-421頁) の試訳である。マテウス I 世の指導した小討論はマールブルク大学で地元出身の学生を応答者として

2. 第一の方式とは、すなわち、ユスティニアヌスがその一方を是認し他方を排斥しているような解答は矛盾しない、というものである。

3. 例えば、ガイウスは学説彙纂第41巻第1章第7法文第7節において板は絵に従うべき旨述べている。反対に、パウルスは同第6巻第1章第23法文第3節において絵は板に従うべき旨解答している。両解答は矛盾しない。なぜなら、ユスティニアヌスは法学提要においてガイウスの見解を支持しているのので、パウルスの解答は退けられるからである。

4. 第二の方式とは、一方の法文は記述的で他方は規律的である、というものである。

5. 例えば、二人が同じ物を全体として占有できる【学説彙纂第43巻第26章第15法文第3節及び同第17章第3法文】。この点は、サビーヌス派の見解から引用されているだけで、肯定されているわけではない。逆に、同第41巻第2章第5節ではプロクルス派の反対説が維持されている。

6. 第三の方式とは、より多く述べる法文とより少なく述べる法文は矛盾しない、というものである。

7. 例えば、全財産の組合員は無限責任を負う【学説彙纂第42巻第1章第16法文】というのはより少なく述べている。一方、一つの物事の組合員もまた当然に無限責任を負い得る【同第17巻第2章第61法文】というのはより多く述べている。

8. これらの方式は互いに全く見事に調和しているように見える。

9. トリボニアヌスは言う、諸法典には如何なる矛盾も存しない、と【勅法

---

為されたものであるが、マテウスⅠ世の後任地フローニンゲンで討論集として編集出版され再刊地もフラネケルであったことをふまえるならば、「ネーデルラント」における法文間矛盾論の一つとして紹介することにさしあたり問題はないと思われる。これら三つの小論は相異なる論述形式をとりつつも、法文間矛盾という共通の論点について、それぞれ、法文間矛盾の積極的に承認する立場（マテウスⅠ世）、原則として否定する立場（スホタヌス）、そして、その中間に位置する「真に矛盾する法文は多くはなくまた皆無でもない」という立場（ヒューベル）から論ずるものであり、しかも、最後のものは同時に前二者に対する批判を展開している。詳細については拙稿「国庫の先取特権（2・完）」（獨協法学第83号）のⅣを参照されたい。

彙纂第1巻第17章第2法文第15節】。

10. これに対して解釈者たちはどうであろうか。彼らもまた上記の手法の何れかによって解消される限りは確かに法における矛盾の存在を否定するが、実際にはその存在を認める。

11. すなわち、トリボニアヌスは互いに矛盾対立するものが見出されることを一切認めない。一方、解釈者たちは、対立の一方が皇帝によって承認され他方が否認されるか、一方が記述的に書かれ他方が規律的に書かれているか、一方がより多く含意し他方がより少なく含意するかの何れかの仕方では解消されない限り、対立の存在を認めるのである。

12. それどころか、解釈者たちからすれば論点そのものがずれている。つまり、問題なのは、矛盾対立の何れが承認され何れが排斥されているのか云々ではなく、互いに矛盾対立する二つのものが見出されるか否かなのである。

13. トリボニアヌスは言う、矛盾対立する二つのものは存在せず、その内の一方だけが存在し、より正しいと考えられるのはまさにそちらである、と。解釈者たちは反対に、矛盾対立する二つのものの存在を肯定する。ただし、皇帝がその内の一方を承認しもう一方を否認するということ、あるいは、一方は単に引用されもう一方は支持されること、あるいは、一方はより多く述べもう一方はより少なく述べるといふこと、はある。

14. トリボニアヌスは言う、相互に矛盾するように見えるものの全てについて、その違いの理由を挙示することができる、と。解釈者たちは、先の手法の一つに頼る限りそれを否定する。実際、矛盾対立する解答が存在せず、その違いの理由が挙示可能であるのであれば、そのような手法に逃げ込むことがどうして必要なのだろうか。

15. トリボニアヌスは言う、皇帝は全てを自分のものとし、皇帝に由来しないことは一切書かれていない、と【前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文第10節】。解釈者たちはこれを否定する。何かを自分のものとするというのは、要するに、私が当然排斥するようなものまで私がつくり定めたかのように見えるということではないのか。単に話しただけのことを私が考えているとは限らないのではないのか。皇帝が全てを自分のものにしたというのは、つまり、全て

を認めたのである。従って、何も否定しなかったし、十分に吟味することもしなかった。

16. もし矛盾対立する二つのものの一方を皇帝が十分に吟味していたならば、私は、皇帝が十分に吟味したのは何れなのかを問い、そしてそれによって、こちらが記述的に書かれ、もう一方が規律的に書かれているということが識別されるのであろうか。

17. 例えば、ウルピアヌスが学説彙纂第42巻第6章第1法文第17節において解答するところによれば、死亡者の財産をその相続人の財産から分離することを請求して前者の財産から満足を得ようとする債権者は、死亡者の財産が足りず相続人の財産が幾らか残されている場合であっても、相続人の財産による残余債権の弁済を後から求めることはできないとされ、パウルスもまた同章第5法文において同じことを認めている。ところが、パピニアヌスは同章第3法文第2節で全く正反対のことを解答している。パピニアヌスが言うには、相続財産から全額が回収できない場合、財産分離を請求した者は、相続人自身の債権者たちが満足を得た後であれば相続人の財産から何らかのものを得られるとされる。

18. それでは、矛盾対立する解答はどこにも存在しないという見解へと解釈者たちを導くべき理由が何かあるのか見てみよう。ユスティニアヌスの証言は前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文の第15節にあり、彼らはあたかも祭壇と暖炉のためであるかのようにユスティニアヌスのために懸命に論ずる。しかし私は答える。何人も自らの事柄について適切な証人とは見なされない【学説彙纂第22巻第5章第10法文及び勅法彙纂第4巻第20章第10法文】、と。

19. 勅法彙纂第6巻第23章第19法文【第1節】において皇帝が自らのために為した証言をあなた方は笑う。あらゆる法は朕の文書箱の中に存する、と皇帝は言っている。にもかかわらずあなた方は法典の中に矛盾がない旨弁護する。そこに果たして一貫性があるだろうか。

20. 皇帝自身、同じく前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文の第13節において、誰も記憶を有するがそこに全く誤りがないのは人間ではなく神にこそ相応しいと認めている。人間がそのようなものであること、つまり、人間の無力

さ故に学説彙纂に矛盾対立する解答が入り込み得ることを認めているのである。

21. それどころか、皇帝は、同節の中で、人間の無力さ故に重複が法典に存する可能性さえ認めている。そうであるとすれば、同じ無力さ故に何らかの矛盾が存しないとする理由があるだろうか。

22. ほとんど二千にも及ぶ書巻から採録され学説彙纂を構成しているこれほど大量の解答群であれば【前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文第1節】、尚更そうである。

23. 更に皇帝は、人間の知性の限界故に、書かれるに値する事柄が見落とされた可能性も認めている【前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文第16節】。そうである以上、同じ限界故に何らかの矛盾対立が書かれていることを否定できるであろうか。

24. そのように大量の矛盾対立に一体如何に対処すればよいのか。同じ名称のユスティニアヌスの最初の勅法彙纂を称賛して皇帝は、勅法「新たな勅法集の編纂について」の第2節や次の勅法「ユスティニアヌスの勅法彙纂の承認について」の第1節において、如何なる重複も矛盾対立もそこには含まれないとしていたが、勅法「ユスティニアヌスの勅法彙纂の改訂並びにその新版について」の第3節と第5節では、最初の勅法彙纂に見出された重複や矛盾対立を除去するよう命じている。

25. 以上から私は証明できる。すなわち、ユスティニアヌスの最初の勅法彙纂における矛盾対立を含まない旨の証言が、まさに皇帝自身を証人として、誤りであった、と。そうである以上、新たな勅法彙纂における矛盾対立が存しない旨の更なる証言もどうして誤りでないと言えようか。

26. 前記勅法彙纂第1巻第17章第2法文第10節において皇帝が全てを自らのものとしたとの言明を一体誰が受け入れるというのであろうか。というのも、互いに矛盾対立し肯定的であると同時に否定的であるようなものを皇帝が自らのものにしたなどということはあり得ないからである。従って、たとえ全てが調和することになったとしてもやはり、皇帝が全てを自らのものとしたという点を私は否定せざるを得ない。

27. 一二の例を挙げるに留めたい。パウルスは学説彙纂第6巻第1章第23法文第3節において、文書が紙に従うがごとく絵は板に従う旨解答しているが、ユスティニアヌスがこの解答を自らのものとしたというのは誤りである。というのも、ユスティニアヌスはこの解答を否認したからである【法学提要第2巻第1章第34節】。

28. 同じくパウルスが学説彙纂第31巻第82法文〔前書〕において次のように解答している。すなわち、あなたが私に対して期限乃至条件付で負担しているものを私に無条件で遺贈した場合、遺贈は弁済のために有効であるが、遺言者が存命中に期日が到来しあるいは条件が成就したならば、遺言が発効し得ない事情が発生したのであるから、遺言は失効する、と。皇帝はこの解答を承認したのであろうか。そのようなことはなく、法学提要第2巻第20章第14節でこれを否認する一方、学説彙纂第35巻第2章第5法文では、遺贈は一旦成立した以上有効であるという、上のパウルスとは正反対のパピニアヌスの見解を承認している。

29. パウルスは学説彙纂第42巻第4章第6法文において、たとえ条件付で金銭の支払が約束されたとしても、債権者は占有を付与されるのが通常である、と解答している。しかし、同じパウルスが同章第14法文〔第2節〕において全く反対に解答している。すなわち、告示の下に財産を売却できる者に占有が付与されるのである以上、条件付の債権者は占有を付与されない、と。ユスティニアヌスが何れかの解答を自らのものとしたということとはあり得ない。なぜなら、矛盾対立するものは同時に存立し得ないからである。

30. 同じ判断は、学説彙纂第15巻第1章第50法文と同第42巻第4章第7法文第15節との組み合わせについても妥当する。また、同第13巻第6章第19法文と同第19巻第2章第41法文との組み合わせその他多くの法文においても同様である。

31. まだ賛同いただけないようであるが、しかし、あなたは動揺し何も反論できない。偏見、そしてまた、法文の矛盾対立を否定する解釈者たちの数の多さが、あなたが私と同じ見解に与するのを妨げている。それ故、物事の真理に至る道を示すような更なる論拠に立ち入るべきであろう。

32. あなたは私のことは信じないかもしれないが、法にこの上なく精通した解釈者たちであれば信じるであろう。というのも、全てが互いに整合していると断言するトリボニアヌスを信じてはならないことについて、彼らは、あらゆる留保を凌駕する偉大な証人となってくれるからである。

過去に奴隷であった者も新たに奴隷になった者も奴隷と呼ばれる【学説彙纂第21巻第1章第65法文〔第2節〕】。このウェヌレイウスの言説を同章第37法文におけるウルピアニスのそれと比べるならば、二つの言説に紛れもない不一致を見出すであろう。それ故、この箇所気付いたラウレンティウス・ワッラはこう述べた。この二つの法律家の見解以上の矛盾対立があるであろうか。両見解について判断が下されているのではなく、両論を併記したか、あるいは、両者が矛盾するとは考えていなかったと解するのでなければ、全く馬鹿げているのではなからうか。推測によって導かれるためには事物の内に多くの手掛かりが存している必要があるが、文言中にこれほどはっきりと矛盾対立が存するのであるから間違いない。以上ラウレンティウス。ユスティニアヌスを信じて学説彙纂には矛盾対立する法文がない、つまり、ユスティニアヌスの表現を用いれば、法文間矛盾がない、とする人々にとっては、このラウレンティウスの言説さえ納得のいくものではないことを知らないわけではないが【前記第65法文へのブダエウスの注釈】。

これらが相互に対立し矛盾していないとしても、肯定するものと否定するものをどうすれば的確に調和させ得るのか私には分からない。アックルシウスが、その予言者めいた解釈と、マルティヌスからヨハネスへ、そして更にはアゾーやブルガルスへ、次々に他の人へと乗り移り、何もでっち上げられないときはアポロ神のところに赴いて辻褄を合わせると言う敢えて言えば軽業師的な敏捷さをもつてしても、ピタゴラスの掟宜しく教師の手でアックルシウスの権威を押しつけられている人々を納得させられないために、軋轢が生じているのを知らないわけではないが【ブダエウス前掲箇所の少し後】。

(パピニアヌスが学説彙纂第31巻第66法文第1節において) 問答契約につき述べていることは、マルケッルス【学説彙纂第46巻第3章第72法文第4節】に基づいて述べたところと矛盾するが致し方ない【コナヌス『市民法注解』第6

卷第2章第6番】。

ユリアヌスとウルピアヌスが矛盾することを解答していないと解するのは困難である【コナヌス前掲書第3巻第7章第4番】。

私の見るところ、ケルススは他の人々と頻繁に見解を異にしており、それ故、この点に着目してみることにはしたい。というのも、全てが調和している旨明言するユスティニアヌスあるいはトリボニアヌスを私は信用していないからである【法学提要第2巻第20章へのクヤキウスの注記】。

都市と田園の不動産の区別についてネラティウスは他の法律家と一致していない。ネラティウスはその所在地で区別するが【学説彙纂第8巻第3章第2法文及び同第20巻第2章第4法文】、他の人々はその性質によって区別している【法学提要第2巻第3章への同じくクヤキウスの注記】。

アフリカヌスは学説彙纂第17巻第1章第34法文においてウルピアヌス（【学説彙纂第12巻第1章第15法文】）と見解を異にしており、古い人々ではフルゴシウス、新しい人々でモリナエウスが正しく吟味している通り、見解の相違は現実のものである【クヤキウス『考察と修正』第8巻第8章】。

ユリアヌスはケルススとしばしば見解を異にしている【同第8巻第35章】。

学説彙纂第29巻第1章第15法文第2節と同第20法文第1節の不一致を認めない者は真理ではなく自己満足を追求していることになる【法学提要第2巻第11章第4節へのホトマヌスの注解】。

ケルススはウルピアヌスの意見に異を唱えているのは明らかであるので、彼らの主張を調和させようと努める者は、円を四角にしようとするのと変わらないように思われる【法学提要第2巻第20章第5節への同じくホトマヌスの注解】。

ウルピアヌスの言葉がユスティニアヌスのそれと対立するのは明白である以上、ウルピアヌスの判断に心酔して自らの判断を顧みず、あるいはまた、ラテン語の規則上そのようなことは不可能であるとも考えない限り、両者の調和のためここに「総額が少ない場合はこの限りではない」という例外を読み込まねばならないのではないかと【法学提要第3巻第19章第5節への同じくホトマヌスの注解】。



パウルスは学説彙纂第31巻第82法文において、その師パピニアヌスの学説彙纂第35巻第2章第5法文に全く明らかに反対している。ここから、学説彙纂という寄せ集めを編み上げた人々の努力と信用の程度が分かる【法学提要第2巻第20巻第14節への同じくホトマヌスの注解】。

ラテン語をひどく歪めない限り、これほど明らかな法文間矛盾は弁護不可能である【法学提要第2巻第1章第25節への同じくホトマヌスの注解】。

この問題について助言を請われたユリアヌスとウルピアニスは互いに異なる解答をしている【同箇所第4節への同じくホトマヌスの注解】。

講義において古代の法律家の間に存した矛盾や不一致の隠蔽ほど有害なものはないと思われる【ホトマヌス『考察と修正』第2巻第21章】。

トリボニアヌスはその法典の中にそのような不一致を残しており、このように無能な人間の残した汚穢をあたかも崇拜するかのようには信心深く扱う必要はない【ホトマヌス『合意論』第1章】。

古代の論争の痕跡を全て除去し、如何なる矛盾対立も残さず、自らの君主によって何が命じられたにせよその全てを実現するのに十分な慎重さ、熱意、学識、知性が一体トリボニアヌスにあったのであろうか。というのも、学説彙纂には、古代における見解の不一致の摘要を不適切にも学説彙纂と呼ぶざるを得ないほど、矛盾対立するように見える見解が散見されるからである【ルドウィクス・カロンダス『蓋然的な事柄』第2巻第1章】。

学説彙纂の幾つかの結び目を剣無しに解こうと試みる者は油と労力を無駄にするとすべきある【エグイナリウス・バロー『ユスティニアヌスによる五十の決定』】

最初の勅法彙纂が勅法間の齟齬無しに公布された旨宣言したユスティニアヌスは、その後、矛盾対立が見出され度に除去しなければならなかった【前掲箇所】。

ユスティニアヌスがトリボニアヌスにあらゆる法文間矛盾を学説彙纂からなくすように命じたからといって私の考えは変わらない。なぜなら、ユスティニアヌスはその同じ箇所ですら命じたことを、「可能な限り」という文言で和らげているからである【前掲箇所】。

これ程に大量の学説の中に不一致や矛盾対立が見出されるとしても驚くべきことではない【アントニウス・アウグスティヌス『修正と意見』第1巻第3章】。

矛盾対立するこれらの見解を調和させられるであろうか。無駄である。というのも、それらの見解が互いに異なることを自ら示しているだけでなく、ユスティニアヌスもまた、古代の法律家の見解でパピニアヌスとは異なるものを幾つも認めているからである【ドネルス『市民法注解』第8巻第11章】。

#### ベルナルドゥス・スホタヌス

#### 「法文間矛盾については如何に判断すべきか」

無分別に法文間矛盾を許容するような法の研究や研究者の評価は極めて低い。鋭敏な感性をもって不一致の理由を可能な限り探究するほうがよい。というのも、不調和の異議を受け付けられないような事柄がしばしば新たに見出されたり、隠されていたりするからである【勅法彙纂第1巻第17章第2法文第15節】。その多くが時代の相違に由来し、また多くが正しい解釈によって与えられる。その際にしばしば区別されるのは、1. カノン法と市民法、2. 封建法と普通法、3. 特別法と一般法、4. 異なる題材、5. 例えば上位の理由と下位の理由、私的な理由と公的な理由、6. 事物の要素、常素、偶素、7. 異なる思考法、8. 文言と意味、9. 法律の意味、拡張、解釈、10. 言説そのもの、前件や後件に従った言説、前提とされている何かに従った言説、11. 事実と法、12. 衡平あるいは対処すべき事柄の利便と、嚴格法あるいは規制法、13. 法の準則と慣習、14. 当然に生じることと偶然に生じること、15. 最優先に為されること、必ず為されること、結果として為されること、16. 修正する法と修正された法、17. 直接の証明となる法と、間接、つまり、論拠として証明する法、18. 規定として述べられた事柄と問いとして述べられた事柄、19. 記述的乃至説明的に述べられた事柄と、規律的に述べられた事柄、20. 論拠と法文それ自体、21. 助言として述べられた事柄と規定として述べられた事柄、22. 絶対的に述べられた事柄と相対的に述べられた事柄、23. 対物性と対人

性、乃至、物的性質と人的性質、24. 抽象的な事柄と具体的な事柄、25. 単なる許容と強制、26. 擬制、法の類似、真理、更には、現に存する事柄と見通し、27. 人の意見と事実、28. 人の予見と法律の要件、29. 法律の不可欠の要件と補充的な要件、30. 原因と結果、31. 全体と部分、32. 素材とその組成物、等々である。

### ユルリク・ヒューベル

「判別の第四類型、法文間矛盾についての判断；

法文間矛盾を解消する仕方や手法が二つ存在するの否かについてながら吟味される」

市民法において傍論にあたるとはいえ不信心で恥ずべきものと解される事柄については以上の通りである。他方、衡平に関わる細かな諸論拠、哲学あるいは論理学の諸法則、要するに真理に反するものとしてアウトウムヌスその他の人々によって最近あるいはかなり以前から非難されてきた事柄については、既に述べたとおり、自分でよく考えてみる努力を要する。残るは、判別の第四類型、すなわち、法律家の解答や元首の勅答が全て互いに整合しているのか否か、言うならば、法文間矛盾に相当するものがあるのかどうか、について吟味する判断手法である。この類型は、全ての類型の中で一番難解ではあるが、我々がここで取り組まざるを得ないほどに広く知られ、この余滴には相応しくないほどに難解で錯綜している。とにかくここでは法の人文的考察の範囲に閉じこもることなく、たとえ最小限のことしか為し得ないにせよ、そこから抜け出てみることにしたい。というのも、我々の直面するものが本来の企図から外れる箇所ではなく、むしろ逆に、格別に注意を引く箇所であるならば、さしあたってはそれらに取り組んでみたいからである。ここで我々が提起したい唯一かつ窮極の命題とは、他でもない、ユスティニアヌスの諸法典には「真に矛盾する法文は多くはなくまた皆無でもない」というものである。これが皇帝自身の明言する点と食い違っているわけではないことは、勅法彙纂第1巻第17章「古法の解明、並びに、学説彙纂に収録された法律家たちの権威について」第1法文と第2法文において様々な命題によって言明されている事柄の列挙に

よって証明されている。ところで、私にはかねがね不当であると思われていた主張をここで黙って見過ごすわけにはいかない。皇帝が自らの諸法典における矛盾の存在を否定しているのであるから、我が師ウィッセンバキウスも著者をその師の『法の基礎に関する討論集』第5討論に追従させることはできなかった。学説彙纂において法律家の矛盾する見解が列挙されているにもかかわらず、それらを法文間矛盾と解する必要を否定する者がいるならば、それは、皇帝がある法文を他の法文よりも優先させ、優先された自らの法や判決が受け入れられるよう欲するということがあり得たということになる。何故か。この人からすれば、皇帝は、自らのものを全てつくったのであり、自分のものではないことは何処にも書かれていないと学説彙纂第二序文第10節で明言してもあるからである。それ故、「何かを私のものにするというのは、要するに、私が当然に排斥するようなものまで私がつくり定めたかのように見えるということではないのか。単に話しただけのことを私が考えているとは限らないのではないのか。皇帝が全てを自分のものとしたというのは、つまり、全てを是認したのである。従って、何も否認しなかったし、吟味することさえしなかった」。これは前掲討論におけるアントニウス・マタエウスの言葉である。これまで人事並びに神事に関する著述家からこれと似たようなことを聞きつける者がいたとしても、そのような者は、他人の見解について吟味し反駁する際、その著述全てについて述べようとはしなかったであろう。たった一つの事例を論拠として提示すればここでは十分である。学識ある人々であれば、空墓碑の風習に関するウルピアヌスとマルティアヌスの間の矛盾以上に明白な矛盾を思い浮かばないであろう。空墓碑について前者は学説彙纂第11巻第7章「宗教物、葬儀費用、並びに、葬儀方法について」第6法文第1節において次のように述べている。すなわち、〈空墓碑〉であるならば、それは売却可能であると解されるべきであり、実際、神皇たる兄弟もそれが宗教物ではない旨勅答を発している、と。一方、後者が、学説彙纂第1巻第8章「物の区分並びに性質について」第6法文第5節において述べるには、「空墓碑もまた宗教的場所であるとされており、この点についてはウェルギリウスが証人となっている」とされる。これは『アエネイス』第3巻[303行]のことであり、そこでは、ヘクトールの灰に捧

げ物をしその霊に呼びかけるアンドロマケーが、緑の芝に被われ二つの祭壇によって祀られた空の墓にいたるところが語られている。マルティアヌスの意図はこのように明らかであり、一方が新たな法によって廃されたことが明らかである以上、両者に矛盾があることに疑念の余地はない。しかし、ユスティニアヌスはどうなのであろうか。彼は、マルティアヌスの言葉の後に直ちにウルピアヌスの言葉、しかも前掲第6法文第1節を全く同じ文言を続けている。「しかし神皇たる兄弟は反対の勅答を発している」、と。先の最終節に立ちはだかるウルピアヌスの名前は、それらがユスティニアヌス自身の言葉であることの妨げにはならないし、それ故、全ては悉く自らものとして作ったと公言していることの妨げにもならないが、かの検閲官たちによって繰り返しの点に異論が呈され、彼らはそうすることで対立する皇帝を明白でしかも愚かな不整合を理由に打ち負かしている。本書の第一部や別の機会に既に言及したこの事例は、この場合、明白この上ない不整合の証拠として例のごとく姿を現したものと受け取られるのである。こうして、学説彙纂のみならず、あらゆる学芸の著述家や歴史が遍く矛盾で溢れていることになってしまう。しかしだからといって、矛盾の承認を回避するために何か好き勝手な理屈をでっち上げようとし、何らかの区別を考案する人々の見解にも与しかねる。三十二にも及ぶそのような区別が実際にスコタヌス氏の『法学演習』学説彙纂第1巻第3章「法律、元老院議決、長期にわたる慣習について」の解釈についての章に見出される。これらの区別以外にも他の人々が別の区別を用いるのをやめることはない。優秀な教師によって提示されるそのような区別の一つとして思い起こされるのが、学説彙纂第15巻第1章「特有財産について」第41法文のウルピアヌスの言葉から引き出された区別である。そこには、「市民法との関連で債務関係に言及しているのではなくむしろ事実を示している」、とある。それ故、この区別は、こちらの法文は法にあちらの法文は事実に帰せられるという具合に、矛盾対立する法文の困難に際して最も頻繁に教師が利用するものとなっている。各人がそれぞれの引用箇所と効能を見出すけれども、その頻度は各人がほとんど何も教示できなかった場合と同じということもあり得る。他の多くの同種の<区別>、要するに、この判別の部門一般について、これ以上追究するつもりはない。